樋口一葉集
北村透谷集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和二年一月十五日印刷
昭和二年一月二十日發行

現代日本文學全集　第九編

著者　樋口一葉
著者　北村透谷

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替東京八四〇二番
電話銀座四五八番
銀座一七三三番

株式會社　秀英舍印刷

樋口一葉小傳

樋口一葉女史、名は夏子、東京に生る。父則義、母瀧子、共に甲州東山梨郡大藤村中萩原の人なり。父は安政年間江戸に出で、幾ばくもたくして、興力の株を買ひて、八丁堀衆に加はる。維新後、職を東京府に奉じて、麹町區山下町の官舎に住す。明治五年三月二十五日、女史は同所に於て生る。女史同胞四人あり、姉藤子、兄泉太郎、虎之助、妹邦子なり。九年本郷六丁目法泉寺南隣に移居。十年春女史本郷小學校に入學、次で本郷四丁目の手習師匠の許に學ぶ。十四年夏下谷區御徒町へ移居。同年冬より十六年冬まで池之端青海小學校に學ぶ。十七年春より半年程、八丁堀に住せし歌人和田義雄の下に歌文を學ぶ。十九年八月二十日醫師遠田澄庵の紹介にて小石川區安藤坂居住歌人中島歌子の門に入る。二十一年春、則義氏官を辭し、芝區高輪に轉居。同年秋神田區表神保町に移り、翌年春同區淡路町に移りて後、同年七月則義氏死去。長兄泉太郎氏は二十年夏死去し、虎之助氏は別家し居りたるを以つて、女史家を繼ぐ。一家は一時虎之助氏の芝區西應寺町の家に同居せしが、女史は内弟子の如き形にて斬時師中島刀自の家に入る。居ること五ケ月程にして、女史は母瀧子、妹邦子と共に、本郷區眞砂町六十番地に卜居。二十四年四月十五日知人野々宮菊子の紹介により半井桃水氏の門に入る。中島門下の同學花岡田邊龍子氏(今の三宅雪嶺夫人)が當時文名ありしに發憤せしものならん。當時半井氏の校閲を請ひしは「かれ尾花」及び逸題の二十四年四月作の短篇なりしが如し。二十五年三月、半井氏等の同人雜誌「武藏野」に載すべき「闇櫻」を草す。これを一葉女史の處女作と見做すべし。浮説ありて六月半井氏の門を離れて後、田邊女史の紹介により雜誌「都の花」に載すべき「うもれ木」を草せしは六月十五日なり。この作あたりより女史の小説、體をなし始む。次で、同じ雜誌のために「曉月夜」を草す。二十七年二月の雜誌「文學界」は女史の作「雪の日」を載す。これより專ら同誌の爲めに執筆。二十七年十二月に至るまでの女史の作「琴の音」「花ごもり」「やみ夜」「大つごもり」は皆「文學界」に現はる。

これより先き、二十六年七月二十日、家を下谷區龍泉寺町(俚俗大音寺前)に移り、荒物店を開く。大音寺前は吉原遊廓の裏手にして、東京にても極めて異風の場所なり。傑作「たけくらべ」が、二十九年四月の「文藝倶樂部」に連載せるゝに至つて、女史の文名全く騒然として、一躍當時の中心作家の列に入れる觀ありき。

二十九年春より病を得、八月に入りて漸く重く、十一月二十三日午前流焉として逝く。享年僅に二十五。越えて廿五日淺草を荼毘に附し、築地本願寺の先塋に葬る。

女史は明治二十四年四月より二十九年七月に至る數十卷の日記を遺したりしが、四十五年四月に至り、友人等相議して、これを諸作に合して、「一葉全集」二卷を刊行せり。女史には「通俗女子書簡文」の著あり。これをも「文範」の名の下に前記全集中に收めたり。女史の死後佐佐木信綱氏の校訂を煩はしたる「一葉歌集」亦世に行はる。

住居の間の觀察に基づくものなり。

二十七年五月一日、本郷區丸山福山町四番地に移る。女史終焉の地なり。女史の諸作「やみ夜」「行く雲」「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」「わかれ道」「われから」等皆この家に於て成れり。二十八年秋「にごりえ」が「文藝倶樂部」に現はるゝや、大に文壇の注意を引き始めしが、二十八年中「文學界」に連載せる「たけくらべ」が、二十九年四月の「文藝倶樂部」に再載さるゝに至つて、女史の文名全く騒然として、一躍當時の中心作家の列に入れる觀ありき。

二十九年春より病を得、八月に入りて漸く重く、十一月二十三日午前流焉として逝く。享年僅に二十五。越えて廿五日淺草を荼毘に附し、築地本願寺の先塋に葬る。

女史は明治二十四年四月より二十九年七月に至る數十卷の日記を遺したりしが、四十五年四月に至り、友人等相議して、これを諸作に合して、「一葉全集」二卷を刊行せり。女史には「通俗女子書簡文」の著あり。これをも「文範」の名の下に前記全集中に收めたり。女史の死後佐佐木信綱氏の校訂を煩はしたる「一葉歌集」亦世に行はる。

北村透谷小傳

北村透谷、名は門太郎、明治元年十一月十六日、相州小田原町萬年町四丁目、醫師北村快藏の長男に生る。父は小田原藩士、明治六年藩の儒者として出京、彼の母と令弟垣雄（後古香と號した）は伴はれたが、彼は祖父及び繼祖母に託されて小田原に殘さる。幼時、母は嚴格よく彼の教育をなしたが、繼祖母は愛情稍うすかつたと傳へられる。透谷は十三歳の時上京、京橋數寄屋町の泰明小學校に入學、翌年十二月卒業に際し、卒業演說をなして明治日報の雜報欄に「奇童」と評された。が、恩師谷口訓導の轉任は彼に憂鬱を感ぜしめ、私塾を轉々して、十五歳の時早稻田專門學校に入學し、多くの書史に親しんで、大政治家たらんとし、また大哲學者たらんと志したが、腦を病んで「全く功名心の椅子より落ちて」旅行家として自然の鑑賞に親しんだ。而して翌年遂に退學、英語研究の目的を以て横濱五十七番館にボーイとなりて果さず、更に速記術を學んで神奈川縣會の速記者を命ぜられ、日給貳圓を受け、縣會終るやグランド・ホテルにボーイとして英語研究の目的完成に努めた。其後十八歳頃には大阪事件に關係して、八王子より京橋彌左衞門町に住せし父君のところに脫れ來つてその叱責に逢ひ、絹の法被を纏うて糸針類の行商をなす等、數奇の日を送つた。明治廿一年十一月三日、相愛の石坂代議士令孃、美那子と凡ての障礙を排して質素なる基督教結婚式を擧げ、かくて美那子夫人は透谷病生の伴侶となつた。

彼の處女作として許されしものは二十二年に發表した「楚囚の詩」であるが、既に十七歳の頃、桃紅の名を以て北海道の某新聞に小說を連載した。後二十三年七月より八月廿七日にかけ、小田原に到つて創作に耽つたこともあるが、その頃のものは未完成で遺つてゐない。歸京後は劇詩「蓬來曲」の創作に苦み、その年十一月廿三日芝公園地內十三號に居を移し、十二月廿九日箱根塔の澤一ノ湯に宿つたが、「みゝずの歌」の詩は此時に生れたのである。彼の作品が多くなつたのはその翌廿四年からで、五月には「蓬萊曲」を發表した。廿五年は彼の飛躍時代で、三月から岩本善治氏の「女學雜誌」に關係すると共に、「宿魂鏡」「德川時代（平民思想）」「厭世詩家と女性」「鬼心非鬼心」「我牢獄」等の多くの作品を發表した。かくて島崎藤村、星野天知、戸川秋骨、平田秀木、馬場孤蝶等の諸氏と相結んで「文學界」を起し、後、上田敏、田山花袋の二氏を入れて、主情的な新しき運動を明治文壇に築き上げた。が、彼はその間も自我の發展に苦悶して、居宅をさへ五月は高輪東禪寺に、八月は芝公園に、十二月は麻布簞笥町に轉々した。一女を儲けて英と名づけたのもこの年である。廿六年「富嶽の詩神を思ふ」「山庵雜記」に加ふるに、幾多の熱烈な批評と詩作を見せたが、不幸にして彼は自らの健康に異狀あるに心付き、同年八月三十日、祖先の墳墓の地である相州國府津在前川村の長泉寺に靜居し、岩本善治氏經營の明治女學校にも、彼は教師としてそこから通ひ、また外人グレスエート主宰の宗教雜誌「平和」を編輯した。その後戲曲「五緣」「十夢」に公曉を主人公とする「惡夢」の大作に沒頭したが遂にならず、力をこめたる「エマルソン評傳」も未完成のまゝ筆を棄て、廿七年京橋彌左衞門町の母の家に歸り、更に以前の住居であつた芝公園に移つたが、同年五月十六日の夜、彼は遂に感ずる處あつて、その住家の樹下に縊死した……年僅に二十七。

其全集の成たのは明治卅五年である。一女は實業家堀越萬三郎氏に嫁ぎ夫人（美那子）は現に東京府立品川高等女學校に教職を奉じてゐる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「樋口一葉集」目次

巻頭寫眞（筆蹟——肖像）

樋口一葉小傳

にごりえ……二
われから……一六
ゆく雲……三三
やみ夜……三九
大つごもり……五三
うもれ木……六〇
雪の日……七三
花ごもり……七六
うつせみ……八六
十三夜……九二
わかれ道……一〇一
うらむらさき……一〇六
たけくらべ……一〇八

小品及隨筆

棚なし小舟……一二八
ほとゝぎす……一二九
そゞろごと……一二九
流水園雜記……一三一

日記

みづの上……一三三

和歌……一三九

著作年表……一四〇

「北村透谷集」目次

巻頭寫眞（筆蹟——照影）

北村透谷小傳

第一篇　芝公園地内にて

厭世詩家と女性……一四二
油地獄を讀む……一四六
伽羅枕及び新葉末集……一四九
粹を論じて伽羅枕に及ぶ……一五一
松島に於て芭蕉翁を讀む……一五四

第二篇　高輪東禪寺境内にて

蓮華草……一五七
歌念佛を讀みて……一五七
星夜……一六〇
脫蟬子に與へてその星夜を評す……一六二
脫蟬子の答……一六三
又脫蟬子へ……一六四
我牢獄……一六四
德川時代平民的理想……一六七
德川時代平民的慮無思想……一七一

第三篇　再び芝公園地内にて

三日幻境……一七六
心機妙變を論ず……一八一
秋窓雜記……一八四
他界に對する觀念……一八六
處女の純潔を論ず……一九〇
鬼心非鬼心……一九三

第四篇　麻布簞笥町にて

富獄の詩神を思ふ……一九六
「罪と罰」の殺人罪……一九七
山庵雜記……一九九
人生に相涉るとは何の謂ぞ……二〇〇
滿足……二〇六
快樂と實用（明治文學管見の一）……二〇八
精神の自由（明治文學管見の二）……二一三
變遷の時代（明治文學管見の三）……二一七
政治上の變遷（明治文學管見の四）……二一九
頑執妄排の弊……二二一
人生の意義……二二三
賤事業辨……二二五
內部生命論……二二六
熱意……二三一
桂川（弔歌）を評して情死に及ぶ……二三三

第五篇　國府津在前川村にて

哀詞序……二三五
ほたる……二三六
蝶のゆくへ……二三八
雙蝶のわかれ……二三八
眠れる蝶……二三七
萬物の聲と詩人……二三七
情熱……二四〇
一夕觀……二四二
ゆきだふれ……二四三

第六篇　斷篇及び草稿

髑髏舞……二四五
彈琴……二四六
みゝずのうた……二四六
月前の柳……二四八
花間蝶……二四八
雨後の花……二四八
友に……二四八
マンフレッド及びフォースト……二四八

第七篇　日誌及び手紙

日誌より……二五〇
二十二歲の時
二十三歲の時
二十四歲の時
二十五歲の時
二十六歲の時
手紙の中より……二五五
石坂美那子へ送りしもの

第八篇　豬遺

蓬萊曲……二六〇

第九篇　未定稿

エマルソン……二六八

著作年表……二一五

樋口一葉集

にごりえ

《一》

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて來るからさう思ひな、ほんとにお湯なら歸りに屹度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言譯しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ來る氣もない癖に、本當に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて闕をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい嬢棒杭に何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私には技倆が無いからね、一人でも逃しては殘念さ、私のやうな運の惡い者には呪も何も利きはしない、今夜も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとん〳〵と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭らしきものなり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大島田に新わらのさはやかさ、頸元ばかりの白粉も榮なく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、煙草すば〳〵長煙管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の浴衣に引かけ帶は黒繻子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の處に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの髷の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、どうで來るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居るに、大抵におしよ卷紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出來るものかな、そして彼の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの紛紜があらうとも縁切れになつてたまるものか、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだのと笑つてお前なぞは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと團扇を取つて足元をあふぎながら、昔は花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つておいでと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店は二間間口の二階造り、軒には御神燈さげて盛り隳景氣よく、空還か何か知らず銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる處も見ゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音折々に騒がしく、女主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば仔細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し賴みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客樣は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便

や商賣がらを心得て口取り燒肴とあつらへに來る田舍ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚看板、年は隨一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎いと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際では存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴えて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いてもいゝとて軒並びの羨み種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、それは今の身分に落魄れては根つから良いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があろがさ、ねえ左樣ではないか、お内儀さんがあるといつて別れられるものかね、構ふ事はない呼出してお遣り、私のなぞといつたら野郎が根から心替りがして顏を見てさへ逃出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは其れとは違ふ、料簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一つにならうとは思ふまい、それだもの猶の事呼ぶ分に仔細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが來るだらうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるがいゝ、何の人お孃樣ではあるまいし御遠慮ばかり申してなるものかな、お前は思ひ切りが能すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れば煙管掃除に餘念のなき風俗向たるまゝ物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すひつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが惡いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫に持つなどゝ勘違ひをされてもならない、それは昔の夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞つて源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止め止めといひながら立あがる時表を通る兵子帶の一群、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相變らず豪傑の聲がかり、素通りもなるまいとてずつと這入るに忽ち廊下にばた〳〵といふ足音、姉さんお銚子と聲をかければ、お肴は何をと答ふ、三味の音景氣よく聞えて果は鶯舞のおともまじりぬ。

《二》

さる雨の日のつれ〴〵に表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉へずば此降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでも遣りませぬと駄々をこれれば、容貌よき身の一德、例になき仔細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民かと問へば何うござんせうかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左樣おもふて居て下され、お華族の姫樣が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な置つぎといふが有るものか、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の作法、疊に酒のまする流儀もあれば、大平の蓋であほらする流儀もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りで

ござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよいよ面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄まじい物語があるに相違なし、たゞの娘あがりとは思はれぬ何うだとあるに、御覽なさりませ未だ鬢の間に角も生えませず、其やうに甲羅を經ませぬとてころ〳〵と笑ふを、左樣ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へずば目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさりましよ天下を望む大伴の黒主とは私が事としよ〳〵笑ふに、これは何うもならぬ其やうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るからとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるにお力かなしくなりて、私だとて人間でござんすほどに少しは心にしみる事もありまする、親は早くになくなつて今はほんの手と足ばかり、此樣な者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だ良人をば持ちませぬ、何うで下品に育ちました身なれば此樣な事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感溢れてあだなる姿の浮氣らしきに似ず一節さむらふ樣子の見ゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さんではあり、一足とびに玉の輿にも乘れさうなもの、それとも其やうな奥樣あつかひ蟲が好かで矢張傳法肌の三尺帶が氣に入るかなと問へば、どうで其處らが落でござりましよ此方で思ふやうなは先樣が嫌なり、來いといつて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思召しましやうが其日送りでござんすといふ、いや左樣は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろしく言ふたと他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、あゝ貴君もいたり穿鑿なさります、馴染はざら一面〻手紙のやりとりは反古の取かへッこ、書けと仰しやれば起證でも誓紙でもお好み次第さし上ましやう、女夫約束などと言つても此方で破るよりは先方樣の性根なし、主人持なら主人が恐く親持なら親の言ひなり、振向いて見てくれねば此方も追ひかけて袖を捉へるに及ばず、それなら廢せとてそれ限りに成りまする、相手はいくらもあれども一生を賴む人が無いのでござんすとて寄る邊なげなる風情、もう此樣な話は廢しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を叩いて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が來るに、おい此娘の可愛い人は何といふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆が來るに閻魔樣へお參りが出來まいぞと笑へば、それだとつて貴君今日お目にかゝつたばかりでは御座りませんか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商賣を當てゝ見ませうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いえそれには及びませぬ人相で見まするとて如何にも落つきたる顏つき、よせ〳〵じつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員樣がありますものか、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒美だと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は御大身の御華族樣おしのびあるきの御遊興さ、何の商賣などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乘せて置き

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

し紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、皆の者に祝儀でも遣はしましやうとて答へも聞かずずん〳〵と引出すを、客は杜に憑かゝつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大抵におしよといへど、何宜いのさ、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の拂ひを取つて殘りは一同にやつてもいゝと仰しやる、お禮を申して頂いてお出でと撒散らせば、これを此娘の十八番に馴れたる事とてさのみは遠慮もいふては居ず、且那よろしいのでございますかと駄目を押して、難有うございますと搔きさらつて行くうしろ姿、十九にしては老けてるねと且那どの笑ひ出すに、人の惡い事を仰しやるとてお力は起つて障子を開け、手摺りに寄つて頭痛をたゝくに、お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此品さへ頂けば何よりと帶の間から客の名刺を取出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへには寫眞をくれとねだる、此次の土曜日に來て下されば御一處にうつしましやうとて歸りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに廻りて羽織を着せながら、今日は失禮を致しました、又のお出を待ますといふ、おい程の善い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと笑ひながらさつ〳〵と立つて梯子を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛防をなさりませ、菊の井のお力は鏘型に入つた女でござんせぬ、又形のかはる事もありますといふ、且那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の女主も駈出して只今は有がたうと同音の御禮、賴んで置いた車が來しとて此處からして乘り出せば、家中表へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝儀の餘光と知られて、後には力ちやん大明神樣これにも有がたうの御禮山々。

《三》

客は結城朝之助とて、自ら道樂ものとは名のれども實體なる處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈竟なる年頃なればにや是を初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何處となく懷かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの樣子を、朋輩の女子ども岡燒ながら弄かひては、力ちやんお樂しみであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥樣とでもいふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけは慶めにおし人がらが惡いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何うだらう氣遣ひになるかも知れないとて冷かすもあり、あゝ馬車に乘つて來る時都合が惡いから道普請からして貰ひたいね、こんな溝板のがたつくやうな店先へそれこそ人がらが惡くて横づけにもされないではないか、お前方も最う少しお行儀を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとずば〳〵といふに、エ、憎らしい其ものいひを少し直さずば奥樣らしく聞えまい、結城さんが來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せやうとて朝之助の顏を見るより此樣な事を申して居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑で呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの嚴命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商賣して居られるは此の力と思召さぬか、私に酒氣が離れたら座敷は三昧堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程々々とて結城は二言といはざりき。

或る夜の月に下座敷へは何處やらの工場の一群、井たゝいて甚九かつぼれの大騒ぎに大方

の女子は寄集つて、例の二階の小座敷には結城とお力の二人限なり、朝之助は寝ころんで愉快らしく話しかけるを、お力はうるさゝうに生返事して何やらん考へて居る様子、何うかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、ナニ頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癪か、いゝえ、血の道か、いゝえ、それでは何だと聞かれて、何うも言ふ事は出來ませぬ、でも他の人ではない僕ではないか何んな事でも言ふてよさゝうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此様な事を思ふのですといふ、困つた人だな種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさ、よしんば造り言にしろ、斯ういふ身の薄命だとか大抵の女は言はねばならぬ、しかも一度や二度逢ふのではなし其位の事を告げたとて仔細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事のあるはめくら按摩に探らせても知れた事、聞かずとも知れて居るが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

折から下座敷より杯盤を運び來し女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行きたくないからよしてお呉れ、今夜はお客で大變に酔ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出來ませぬと斷つておくれ、ああ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかえ、はあ宜いのさとて膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら、御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何もそんなに體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひどからう、追ひかけて逢ふがよい、何なら此處へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話の邪魔はすまいからといふに、冗談はぬきにして結城さん貴君に懲したとて仕方がないから申しますが町内で少しは巾もあつた蒲團やの源七といふ人、久しく馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家にまい〳〵つぶろの様になつて居まする、女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに來る歳ではなけれど、縁があるか未だに折ふし何の彼のといつて、今も下座敷へ來たのでござんしやう、何も今さら突出すといふ譯ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようございますとて、撥を疊に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと嬲る、あゝもう歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあ其様な處でござんしやう、お醫者様でも草津の湯でもと海濱しく笑つて居るに、御本尊を拜みたいな俳優で行つたら誰の處だといへば、見たら喫驚でござりましやう色の黒い背の高い不動さまの名代といふ、では心意氣かと問はれて、此様な店で身上はたく程の人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人といふに、それにお前は何うして逆上せた、これは聞き處と客は起かへる、大方逆上性なのでござんしやう、貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥様のお出來なされた處を見たり、ぴつたりと御出のとまつた處を見たり、まだ〳〵もつと悲い夢を見て枕紙がびつしよりに成つた事もござんす、高ちやんなどは夜寝るからとても枕を取るよりはやく鼾の聲たかく、好い心持らしいが何んなに羨ま

しうござんしやう、私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴えてそれはそれは色々の事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察して居て下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふかそれこそはお分りに成りますまい、考へたとて仕方がない故人前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締りなしだ、苦勞といふ事は知るまいと言ふお客様もございます、ほんに因果とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潸然とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰めたいにも本末をしらぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど實があらば奥様にしてくれろ位言ひさうなものだに根つからお聲がゝりも無いは何ういふものだ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商賣を厭だと思ふなら遠慮なく打明けばなしをするが宜い、僕は又お前のやうな氣では寧氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事かと思つたに、それでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、苦しからずば承りたいものだといふに、貴君には聞いて頂かうと此間から思ひました、だけれども今夜はいけませぬ、何故々々、何故でもいけませぬ、私が我まゝゆゑ、申すまいと思ふ時は何うしても厭でござんすとて、ついと立つて縁側へ出るに、雲なき空の月かげ涼しく、見おろす町にからころと駒下駄の音さして行かふ人の影明かなり、結城さんと呼ぶに、何だとて傍へゆけば、まあ此處へお坐りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ許の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく〳〵憎いと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な惡者に見えまするかとて、空を見あげてホツト息をつくさま、堪へかねたる樣子は五音の調子にあらはれぬ。

《四》

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさゝれぬ窮屈さに、足もとゝては處々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、兩側に立てたる棟割長屋、突當りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、さすがに一方口にはあらで山の手の仕合に三尺許の縁の先に草ぼう〳〵の空地面、それが端を少し圍つて青紫蘇、えぞ菊、隱元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるがお力が所緣の源七が家なり、女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生え次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の浴衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬやうに小針のつぎ當、狹帶きりゝと締めて蟬表の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりての稼ぎはしなく、擂へたる籐を天井から釣下げて、しばしの手數も省かんとて數のあがるを樂しみに脇目もふらぬ樣あはれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて來ぬ、源さんも又何處を歩いて居るかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をばちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の縁に持出し、拾ひ集めの杉の葉を被せてふう〳〵と吹立れば、ふす〳〵と烟たちのぼりて軒端にのがれる蚊の聲凄まじゝ、太吉はがた〳〵と溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて來たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかと何の位案じたらう、早くお這入といふに太吉を先に立てゝ源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお歸りか、今日は何んなに暑かつたでしやう、定めて歸りが早からうと思ふ

て行水を沸かして置きました、ざつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯に這入なといへば、あいと言つて帶を解く、お待お待、今加減を見てやると流しもとに盥を据ゑて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さん此子をもいれて遣つて下され、何をぐたりとしてお出なさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つて居ますからといふに、おゝ左樣だと思ひ出したやうに帶を解いて流しへ下りれば、そゞろに昔の我身が思はれて九尺二間の臺所で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手傳ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん背中を洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、おい〳〵と返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしさば〳〵の浴衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帶まきつけて風の透く處へゆけば、妻は能代の膳のはげかゝりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小丼に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか臺より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよいと搗ぎ出す、坊主はおれが傍に來いとて頭を撫でつゝ箸を取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとて茶碗を置けば、其樣な事がありますものか、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、氣合ひでも惡うござんすか、それとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も何とも無いやうなれど唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな眼をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど、今の身分で思ひ出した處が何となりまする、先は賣物買物お金さへ出來たら昔のやうに可愛がつても呉れましやう、表を通つて見ても知れる、白粉つけて美い衣類きて迷ふて來る人を誰れかれなしに丸めるが彼の人達が商賣、あゝおれが貧乏になつたから構ひつけて呉れぬなと思へば何の事なく濟ましやう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つてお出なさらう、二葉やのお角に心から落込んで、かけ先を殘らず使ひ込み、それを埋めやうとて雷神虎が盆筵の端についたが身の詰り、次第に惡い事が浸みて遂ひには土藏やぶりまでしたさうな、當時男は監獄入りしてもつそう飯たべて居やうけれど、相手のお角は平氣なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌して居まする、あれを思ふに商賣人の一德、だまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、それこそ路頭に迷はねばなりませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出來やうならお力はおろか小紫でも揚巻でも別莊こしらへて圍ふたら宜うござりましやう、もう其んな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしう沈んで仕舞ましたといふに、みれば茶碗と箸を其處に置いて父と母との顏をば見くらべて何とは知らず氣になる樣子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、いやおれだとて其樣に何時迄も馬鹿では居ぬ、お力など名ばかりも言つて呉れるな、いはれると以前の不出來しを考へ出していよ〳〵顏があげられぬ、何の此

身になつて今更何をおもふものか、飯がくへぬとてもそれは身體の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬゆゑ小僧も十分にやつて呉れとて、ころりと横になつて胸のあたりをはたはたと打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもゑて身の熱げなり。

《五》

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色づくり、何處にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘える聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃はちよち〳〵あわゝの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる者なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に眞からの涙をこぼして、聞いておくれ染物屋の辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつぴいのお六めと悪戯まはして、見たくもない往來へまで搗ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた料簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に家でも拵へる仕覺をしてお呉れと逢ふ度に異見をするが、其時限りおい〳〵と空返事して根つから氣にも止めては呉れぬ、父さんは年をとつて、母さんと言ふは眼の悪いい人だから心配をさせないやうに早く締つてくれゝば宜いが、私はこれでも彼の人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心では何時引取つて呉れるだらう、考へるとつく〳〵奉公が厭になつてお客を呼ぶに張合もない、あゝくさ〳〵するとて常は人をも欺す口で人のつらきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、あゝ今日は盆の十六日だ、お閻魔様へのお參りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもらつて嬉しさうな顏してゆくは、定めて定めて二人揃つて甲斐性のある親をば持つて居るのであろ、私が息子の與太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何處へ行つて何んな事して遊ばうとも定めし人が羨ましかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母は此樣な身になつて恥かしい紅白粉、よし居處が分つたとて彼の子は逢ひに來ても呉れまじ、去年向島の花見の時女房づくりして丸髷に結つて朋輩と共に遊びあるきしに土手の茶屋であの子に逢つて、これ〳〵と聲をかけしにさへ私の若くなりしに呆れて阿母さんでございますかと驚きし樣子、ましてや此大島田に折ふしは時好の花簪さしひらめかして お客を捉へて串戲いふ處を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる時今は駒形の蠟燭やに奉公して居まする、私は何んなつらき事ありとも必らず辛ん防しとげて一人前の男になり、父さんをもお前をも今に樂をばおさせ申します、何うぞそれまで何なりと堅氣の事をして一人で世渡りをして居て下され、人の女房にだけはならずに居て下されと異見を言はれしが、悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の臺所を這ふも柔弱の身體なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の樂なれば、此樣な事して日を送る、努さら浮いた心では無けれど言甲斐のないお袋と彼の子は定めし爪はじきするであらう、常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涙ぐむもあるべし、菊の井のお力とても惡魔の生れ變りにはあるまじ、さる仔細あればこそ此處の流れに落こんで嘘のありたけ串戲に其日を送つて、情は吉野紙の薄物に、螢の光ぴつかりとするばかり、人の涙は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向く

つらき餘處日も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゝまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涙、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに、根性のしつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蜘の糸のはかない所を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何處の店にも客人入込みて都々一端歌の景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて調子の外れし紀伊の國、自まんも恐ろしき胴間聲に霞の衣衣紋坂と氣取るもあり、力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつたやつたと責められるに、お名はさゝねど此座の中にと普通の嬉しがらせを言つて、やんややんやと悦ばれる中から、我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怖し渡らねばと謠ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ私は一寸失禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何處へゆく何處へゆく、逃げてはならないと座中の騒ぐに照ちやん高ちやん少し頼むよ、直き歸るからとてずつと廊下へ急ぎ足に出でしが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町の闇へ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれるものなら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ厭だ厭だ厭だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、靜かな、靜かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬくだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ厭だ〜〜と道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怖し渡らねばと自分の謠ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて來るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、お祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも憐れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふと一口に言はれて仕舞う、えゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通して行かう、人情しらず義理しらずか其樣な事も思ふまい、思ふたとて何うなるものぞ、此樣な身で此樣な業體で、此樣な宿世で、何うしたからとて人並では無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞するだけ間違であろ、あゝ陰氣らしい何だとて此樣な處に立づて居るのか、何しに此樣な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もう〜〜歸りましやうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぶら〜〜歩けば、行かよふ人の顏顏小さく〜〜摺れ違ふ人の顏さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや〜〜といふ聲は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の聲は、人の聲、我が考へは考へと別々になりて、更に何事にも氣のまぎれるものなく、人立おびたゞしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは廣野の原の冬枯れを行くやうに、心に留まる物もなく、氣にかゝる景色にも覺えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのかと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何處へ行くと肩を打つ人あり。

（六）

十六日は必らず待まする來て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不圖出合て、あれと驚きし顏つ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com